肉声のつながりを求めて

――学級通信発行の実践から――

田中宏幸

一人の父親が、「クラスノート（母親版）」に次の詩を記してくれた。ほぼ十年前にその父親が学級通信を発行しつづけていたその時の思いを、私もまた味わい続けていた。

日曜日の朝

日曜日の朝
ガリ切りをする
一字一字　刻明に
ゴリゴリゴリと　鉄筆を運ぶ。

団地の朝はまだ眠っている。
食卓を机代りに
一字一字を刻みつける。
読む人の顔を思い浮かべて
ゴリゴリゴリと　鉄筆を運ぶ。

きらめく朝の光である
五階の窓に矢車草が咲いている。
ガリ切りを始めて四回目の日曜日である。

今までは真夜中に切っていたが、気持ちがあせるのでやめにした。

一人の工員の顔が浮かぶ。
中学生の子どもを持つ工員が
朝五時に起きて、中学生ぐらいの
数学の勉強を一人している、という。
あれは八年前だった。
その工員はもう年寄っているだろう。
子どもも二十歳（はたち）を過ぎているだろう。
今朝もその工員は
数学を解いているだろうか。

日曜日の朝
窓の外の海は光っている。
家族連れが行楽に出かけていく。
バスや車が走りかう。
ぼくはゴリゴリと　文字を刻む。

今までの罪をつぐなう思いで
ゴリゴリ　ゴリゴリ　鉄筆を運ぶ。
怠け者のぼくと別れるため
ぼくと関(かかわ)りのあった多くの人々に
不誠実であった罪を埋めるため
いつもいつも自分をごまかして
とうかい趣味のぼくと別れるため
ぼくは　ゴリゴリとガリを切る。

意味なんかないかも知れない。
何のためでもないかも知れない。

ぼくにわかったことは
日曜日に遊びに行くよりも
読書をしたり、テレビを見るよりも
これまでに試みた何よりも
ゴリゴリと鉄筆を運んでいく方が
何倍も楽しいということだ。

一枚の原紙が切り上がり
やっとできたときの
充実感は
大げさに言えば
生きている実感をつかんだような
満足感を覚える。

確かに実体のあることばが
明日には印刷されて
何十人かの人に確実に読まれるのだ。
それは実に確かなことだ。

もう陽は高い。
鳩がベランダに飛んでくる。
小鳥がさえずる。
明るい五月の光の中で
ゴリゴリゴリと　鉄筆を運ぶ。

まだ見ぬ人々に支えられて、
小さな小さな　文字を刻む。

（赤松　徹）

一、学級通信発行の経緯――「むつごろう」（一年六組）

創刊は77年4月である。その年入学してきた加古川東高校一年六組の生徒にむけて発行してから、その学年の生徒が卒業していった80年2月まで、不定期だが通算29号234ページの通信を出し続けてきた。

初めから明確な狙いがあったわけではない。川崎の小学校教諭村田栄一氏の「ガリバー」や、東京の中学校教諭相川忠亮氏の「きま

ぐれ月報」（いずれも社会評論社刊）に触発されて、気ままにやってみようと思っただけである。

ただ、それまでの三年間をふりかえってみても、改まった話や説教臭い話をする時には、常に奇妙な照れと空々しさを感じずにはいられなかったので、「どうしても伝えておきたい話だけは書きとめておくことにしよう。そのことでいつか気がついてくれればよい。」というわずかな願いだけを持っていた。

77年度の通信は「むつごろう」と名付けた。1号は自己紹介の特集である。このことは、どの年度も同じである。時には担任による他己紹介も交えたが、とりあえず、お互いのことを知り合うよすがになればそれでいいのである。

2号以下6号まで、新入生オリエンテーションや、文化祭、クラスキャンプ等、学校行事やHR行事の記録にかなりのスペースをさいた。それらの記事の執筆は生徒に依頼した。生徒の眼からみたものを書きとめておきたかったからである。

時には図書の紹介をしたり、熱のこもったHR討議ができると、ノートを頼りにそのHR討議をそのまま再録したりもした。

だが何か記事ができたらガリ版にむかうという心づもりでしかなかったので、発行は次第に間遠なものとなってしまった。生徒からの反応がほとんどなかったのも寂しいことであった。今、読みかえしてみても、担任の一方的な自己主張に終始しているという印象は否めない。

生徒の声がきこえてこない、生徒の姿がどうもつかめない、そんな思いにかられて、秋からは、クラスノートを回覧させたりもした。しかし、これもそう順調にはすすまず、かろうじて一巡したところで年度末を迎えてしまった。

二、「ゴンベとゴンコ」（二年五組）

一年目は肩に力が入りすぎていたのかもしれない。そう思って、一号毎のページ数は半減しても、発行間隔を縮めることを心がけた。名称も、五組にひっかけて、男がゴンベエなら、女はゴンコだとばかり、「ゴンベとゴンコ」などと気楽なものにした。この年の第一号には、例によって自己紹介した後、次のように書きとめている。

「てなわけで、今年は少し肩から力を抜いて、もういっぺん一からやり直そうかと思っている。

学級通信は去年も出していた。一の六だったから、六にひっかけて『むつごろう』という名で六号まで出した。通算70ページの通信だった。反応はあまりなかった（何といってもおとなしい者が多かった）。それにもめげず、性懲りもなく、学級通信を何で出すのか。自分でも不思議に思えてしまう時もある。好きでやっていると言えばそれまでかもしれない。ただ少なくとも次のようなことは言えそうに思う。

昔から石の上にも三年と言って、頭の鈍い僕でも、四年もやってりゃ『学校』という所がどんな所か大体わかってくる。わかってくればくるほど、僕が一人であがいてみてもどうにもならん所だというのも少しずつわかってきた。集団で生活する以上、何らかの制約と義務とが生じるのはあたりまえのことだ。そのあたりまえのことまでもはみ出していこうとすれば、僕は皆の前に立ちはだかること

もでてくるだろう。だが、一方で、その『あたりまえ』の上で胡座をかいてしまうことにどうしようもないためらいを感じてしまう。うっかり、学校そのものがもってるその『あたりまえ』に安易にのっかってしまったら、どこへ行ってしまうかわからない、そんな不安だ。教育基本法第十条『教育は、不当な支配に服することなく、国民全体に対して直接に責任を負って行われるべきものである』を、僕はその『直接責任』をとりきろうとする地点で、僕は、僕の『肉声』を君たちに、更に、君らのお父さん、お母さんに伝えたいと思っている。勿論、僕の『肉声』とてあやしいものだ。いつどこでどうなってしまうやらわからない。今もうすでに多くの過ちをくり返しているにちがいないのだ。だからこそ、どんどん批判を寄せてもらいたい。気づき次第改めたいと思っている。」

去年の反省もあって、何より生徒の声が聞きたかった。そしてできれば親たちの声も聞きたかった。そこで、クラスノートを二種類作ることにした。まず生徒版のノートを三冊作った。回転を早くする為である。一巡するのに二か月も三か月もかかっていたのでは、対話の場たりえないと思ったからである。更に母親版のノートも三冊作った。これは地域割りとした。配達人は子供たちである。配達の途中で子がこっそりとのぞいてみるということがあってもいい。そのことで、親と子の対話のきっかけにもなればいいと考えた。始めるにあたっては賛否両論あったが、大半の人が「何もしないで嘆いているより、たとえ人まねでもやってみることの方が大切だ」という考えを支持してくれた。

これは意外なまで順調に展開した。ほぼ三日に一度私の手許に帰ってくる度に、何が書いてあるかわくわくしながらノートを開いたものである。面白い記事や共通の話題になりそうなものは、ガリを切って通信として配布した。特に仕事を持ったあるお母さんの、仕事と家事との両立や、子供とのつきあい方に、迷い放しであるという記事には、すばやい反応がみられた。生徒たちは例によって、ほとんど反応を示さないので、LHRを利用して、アンケートをとってみたりした。「自分の母はいい母か、いやな母か」とか「母親が働くことをどう思うか」とか「母に望むこと」など、幾つかの項目について、その結果の詳細を特集した。16ページにおよぶ「ゴンベとゴンコ」5号は、ずいぶん茶の間の話題になったそうである。この特集に寄せて、私は次のようなことを記した。

「わずか四年という短い年月であれ、『教育』という仕事に携わっていると、さまざまな親子関係に遭遇することになります。ある時は、『過保護』という形容をあてはめざるをえないような関係にもでくわしました。子供が自立してゆくために試行錯誤してゆくすじ道を断ってしまうのです。子供の方にも勿論問題はあったのですが、そんな関係の中で、彼はとうとう学校にも来なくなってしまいました。(その事を痛みなしに思い出すことはできません)。また一方で『ああすばらしい』と思わず絶句してしまうような親子関係にめぐりあうこともできました。

たとえばKさん。Kさんはご主人が同和教育を担当されていて大変多忙なため、一人で家事と農業とをきりもりされているのですが、田植えなどでとりわけ忙しいときに、娘に、『お母さん、忙しいのなら手伝ってあげましょうか』などと言われて、次のように返事さ

れたというのです。『家事にしても田んぼにしても、これは私の仕事なんだから、あんたが〈手伝ってあげよう〉なんて気でいるうちは、私はこれっぽっちも手伝ってもらおうとは思わない。ただ、もし、あんたが私のしている仕事を一緒にやりたい、私の仕事の一部分を自分の仕事としてやりたい、学びたい、という気になった時は、私は、私が今までつかみとってきたものを全部あんたに伝えたげる。』――家のことを手伝わせて、十分に勉強させてやれないから子供に申し訳ないというふうに考える母親が多いこの頃です。こんなお母さんの生き方に感心させられてしまいました。

また別のあるお母さんは、順位が何番だから、偏差値がいくらでしかないからという叱り方は絶対になさらないと聞きます。その子が、自分がもっているはずの力を、なまけることで十分に発揮しようとしなかった時は厳しく叱りつけるものの、結果によって判断することはなさらない、というのです。

高校生たちは、決して甘やかされることを望んではいない、と僕は思っています。しかし理不尽な叱り方には猛烈に反発するものです。どんなに乱暴で粗雑に見える子供であっても、自分で納得できれば、非常にすなおな子供に一変します。

今年の文化祭で、演劇部が上演した自作自演の『ショッキングミュージカル・やんなった』でも、親や教師たちは、『なぜ私たちを成績やヘンサチというモノサシでしかはかろうとしないのか。』という問いにさらされつづけました。そして彼らは、その問いを発しつつ、自らにむかって、『家出したって、自殺したって、無気力に生きたって、それは逃げでしかないじゃないか。』と問いつづけておりました。

『あなたの将来のためなんだから、とにかく余計なことを考えないで、勉強しなさい。』という発想からはもう抜け出さなくてはいけない。僕はそんなことを考え続けていたのです。」

三、さわやかな親たち

こうした特集を何回か組む中で、最も有難かったのは、さわやかな親たちとめぐりあえたことである。

極論めいた言い方をすれば、〈人質〉を預けている親たちは、言いたいことがあっても教師には何も言わないものだが、ノートを通じて、あるいは時には電話で、また時には家庭訪問に出かけた先で（夏休みに一週間程度の期間で全家庭を訪ねた）、親が子にどんな願いを抱き、教師にどんな要求をもち、そしてどんな不安を抱いているのか、きかせてもらうことができた。

そのなかでも特筆すべきは、Uさんである。彼女の子供を担任していたわけではない。神戸の東灘区で週に一回、絵の教室を開いている一人の主婦である。

78年5月10日夕刻、雨をついてAさんが学校にかけつけてくる。「この写真をみて下さい。」と、盲児のつくった母子像をみせてくれる。神戸市立盲学校の福来先生が、全盲児たちとの間につくりあげた見事な結晶である。母と子がしっかり抱きあった像、空にむかって叫び声をあげている像。それらの彫塑の写真に二枚のプリントが添えられている。Uさんの手になるクロッキーである。（AさんとUさんとは高校以来の親友らしい）

「『お母さん』といっても、ほとんど丸ぼうずです。お母さんをさわってみることしかできない子供達は、お母さんの頭の形が丸いことを知ったのです。（目がみえる者にとっては、女の人の髪型がさき目に入って、中みがどうなのかついぞ気がつきません）」

「どの作品にも立派な耳があること。よくきこえる耳がしっかりついています。私たちなら、絵をかいても耳はよく忘れます。」

「『お母さんになりたい』のおちちだって、描いていなかったら、ただのかたまりに見えるだけで、それが大きな三角にとがったようなお母さんのおちちだと気付かなかったでしょう。」

「私は描いてよかった。描かせてもらってよかったと思いました。かくことは、よく見ることにつながっていることがわかりました。」

クロッキーに添えられたこれらの言葉は、私には衝撃であった。目の見える私たちより、目の見えない子供達の方が、実は本当の中味が見えているのではないか。そのような問いかけが私をつき動かしていた。同じ一つの像をながめながら、このように深く暖かく受けとめることのできる感性のありように絶句していた。Uさんは、その後、通信を発行する度に返事をくれるありがたい存在となっている。

さわやかな親たちは、もう一人挙げておかねばならぬだろう。二年の学年末に気胸を病んだKは、手術は成功したものの、三年になって登校しなくなってしまった。ある種の「登校拒否」であった。Kを、私は一年の時担任したが、二年では別のクラスとなった。三年で再会したものの、こうした予想外の学年初めとなっていた。母親から電話がかかってくる。あるいは達筆の手紙が寄せられる。私も、頻繁に家庭訪問する。何とか対話は成立したものの、「学校に行きたくない」という彼の姿勢はやわらぐことがなかった。二年時の担任は「彼はノイローゼだ。心理療法をうけた方がよい。」と勧める。私は「断じて病気ではない。何かのきっかけさえあれば立ち直れる。」と断言していた。五月末（79年）、HRでKのことをとりあげる。話し合いなど面倒だと考えている生徒は、「ぐずぐず言わずに迎えに行こう。」と短絡的な発言をする。「学校に来たくないと言うのなら、放っておけばよいではないか。」と発言をする生徒すら出てくる。すかさず反論が出される。延々三時間にわたる討議を踏まえ、あとは、生徒達がどういう動きをするか、私は見守ることにした。翌日から、登下校時に何人かが彼の家を訪ね、話し込んでくる。遠くて行けないものはノートの切れはしに手紙をしたためては託していた、そしてKは六月中旬、突然登校を宣言する。

Kの「登校拒否」の原因は未だにわからない。気胸手術による長期欠席は、そのきっかけにすぎないだろう。弟が難聴で、兄であるKに期待が集まりすぎたのか、それとも、母親の愛情が弟に傾きすぎたのか。何故彼が登校を「拒否」したのか。そして何故、六月中旬に突然、学校に来る気になったのか、私には未だにつかめない。

話をしたかったのは、しかし、Kの心理を分析することではない。Kの母親のさわやかさを語りたいのである。

六月下旬、Kの母親が差し出し人にはなっていたが、今までの達筆ぶりとはうってかわって稚拙な文字の手紙が届いた。「先生、これが私の本当の姿です。」と記してある。今までの手紙はすべて、父親の代筆であったということだ。40歳をすぎた母親が、まだ30歳

にもならぬ私に、今まで自分で恥だと思いこんでいたものをすべて晒け出してくる。その謙虚さに頭が下った。

Kの母親から難聴の子を育てあげたのだという奇妙な自負は消えていた。（誤解しないでほしい、難聴の子供を普通学級に入れつづけてきたその母親の見事さを否定しているのではない）。今、Kの母親は家庭新聞を週刊に近い間隔で発行しつづけている。A4大のコピーで親子の対話を回復させようとしている。最近は近くの母親たちも愛読していると聞く。Kも親と冗談を言い合うようになってきた。こうしたKの母親のエネルギーが私にはとてもさわやかなのである。

四、「三〇九通信」（三年九組）

三年目も通信とクラスノートとは続けることにした。母親版は継続しなかった。その理由は後述する。

内容はほぼ定着してきていた。自己紹介の号を発行し、その後は、学級懇談会の報告をしたり、学校行事の特集（文化祭・美化コンクール・音楽会等）を組んだ。受験を目前に控えているのだからという奇妙な遠慮が私の側にあって、生徒にはあまり書かせなかった。そのくせ、孤立化してゆく生徒一人一人に愚痴をこぼして、事足れりとしていた。

そんな時、Mが学級日誌にこんな批判を書きとめてくれた。

「10月24日。同和HRが始まったとき、どういう風に何を言ったらいいのか、よくわからなかった。関係のない話をしている人がいたのは、私も腹が立ったけど、先生の言い方にはもっと腹が立った。だいたい二学期になってから先生はひどい先生になった。生徒の私が先生のことをこのように言っては失礼だとは思うのですが、二学期になってから、先生はひとりおすねになったり、いやみたらたらおっしゃったり、頭にカチカチくる。あの通信でもそうです。（5号で、掃除をしないことを、美化コンクールで優勝したことをひき合いに出して皮肉ったことを指す）「昔々……」あたっているからこそ、そう思うのだろうけど、皮肉ですね、あれは。今日でも最後にああ言われるのではないかとおおよその見当はついていました。先生は私たちの反応が見たいとおっしゃいますが、面とむかっての抗議はしにくいものです。やはり相手が先生だと思うと、心の中に留めておいて、先生に対する反感がつもりつのってしまいます。

それを今日言わせてもらってます。全面的に私の立場に立ってます。先生の立場というか、いらだちというか、そのようなものが、わからないことはないのですが、こういう感じ方をしているものがいるということをちょっとしたためました。気持ちがうまく表現できないのが大変じれったいです。」

この批判は本当にうれしかった。曇天が一挙に晴れ渡ったような気さえした。この批判をそのまま学級通信に紹介した頃から、クラスノートも、びっしり書きこまれるようになってきた。ある生徒は一夜に八ページも綴ってくる。内容も自己を深くみつめたものが増えてきた。例えば、Iが綴った文章の一部分。

「学校に何しに来とんかなあ。二年の時に、『お前学校にサッカーと弁当と寝に来とんやろ』とよく言われた。『アホか』と言いかえしてはいたが、かなりあたっていたような気がします。最近もよ

く『三宮からわざわざ何しに来るんや』と言われると、『何しに来とんのかなあ』と思う。確かに三年になって、勉強のウェイトはふえたけど、勉強なら家でも十分だ。図書館ならなおさらできる。運動だって、何もわざわざ学校で、いやいや好かん先生ににらまれながらせんでも、よそでもできる。K君が休んでいる時、『学校は楽しい所や』とか『東高は住みよいから来たらええのに』とか言っている人がいたが、本当だろうか。聞くところによると、生徒会執行部は教師からおさえられていたそうやし、教師の中でも、長老みたいのが権力持っていたり、昔の軍隊みたいに生徒をおさえつけようとするのがいたり、気にくわんことがいっぱいある。そんな所にわざわざ来なあかんのやろか。単位取るために来とんのやろか。やっぱり三年になると、東高は予備校とかわらへんのかなあ。それでも毎日学校行くんは、惰性になっとるからなのかなあ。（中略）

僕らのやってることは誰かにやらされている、わくの中にはめこまれているような感じがしませんか。ただ何となく高校へ行って、大学へ行って適当にサボって、卒業するまでに外国旅行ぐらいして遊んで、できるだけ高い給料のもらえる所へ職につく。あとは家族のために働く……こんなアホらしい。小さなわくの中で幸福には暮らせるかもしれんけど、どこも前の世代と変わりがないでしょう。……とにかく今の汚れた社会はノアの箱舟の時の洪水のように一ぺんどないかせなあかんのとちゃうか。」

このように批判がとびかったり、自己を深く見つめる姿勢が生まれてくることこそ、私が、クラス作りで狙ってきたものだと言ってもよい。

五、学級通信発行の意味

学級通信は、気ままに始めたものにすぎないが、ゴリゴリとガリを切りながら、私のめざしているものがいったい何であったか、次第に明らかになってきたということだ。それは、相川忠亮氏の言葉を借りれば、「公倍数的人間関係」ということだが、つまり、相手を「切り」、また相手から「切られ」ながらも、なおその二者が結びついている、いわば〈切り結び〉の人間関係なのである。

もう少し相川氏の言葉を引用する。

「〈集団〉とか〈組織〉のいやらしさは、往々それが〈公約数〉だけを大事にするからであって、そういう状況では一人一人を、まさに彼または彼女にしている〈個人〉の独自性が余計な邪魔物になってしまうからだ。共通の目的にむかって共同行動をするにあたっての妥協、〈小異をすてて大同につく〉ということが必要な場合もあるに違いないが、それはあくまで限定した目的のための一時の方便でしかないと僕は思う。

人が生きていくということがつまるところ自己を表現するということだとすれば、そこからする人間関係の夢があってもいいだろう。それが〈公倍数的関係〉だ。

そこにおける〈共通点〉は、個性を捨象することによってつくられるのではなく、相手の個性に匹敵するものを自分の中につくり出すことによってつくられることになる。互いに個性を発揮しあうことがひいては共通の広場をより豊かに広げることになる。

〈公約数的関係〉では本質的には自分も相手も変らない。共通点

だけ確認して、自他の個性は相手を刺戟しないように関係の外におかれる。

それに対して〈公倍数的関係〉では、お互いの自己主張、自己表現が出発点であり、関係を結ぶということは互いに変わりあって公倍数をつくりあうということだ。相手の個性に自分の個性をぶつけて、お互いが公倍数にまで広がらなければならない。

〈公約数〉はもともと自分の中にあったものを発見すれば足りるが、〈公倍数〉は自分全体を足がかりにし、相手を消化してつくりあげるものだ。自分が自分であるゆえんのものがとても大切なものであるということとまったく同じ意味で、相手が相手であるゆえんのものがとても大切になる。

理屈としてはかっこいいが、これはなかなかしんどいものだろう。〈変る〉ためにはエネルギーが必要だろう。

また、〈公倍数的人間関係〉というのは、かならずしも、常に楽しく甘いものではないのだろう。それは、時には、自分は何でしかないのかということを痛切に感じてしまうような、相互の格闘関係を予想させるものだと思う。生きていくということはしんどいものだ。」

私が目指したものも、これとほぼ等しい。そのため、生徒一人一人に自己を晒すことを要求したし、私自身も自己を晒し肉声で対峙しなければならなかった。

ただ、それには、教師の側の眼がどれだけ澄んでいるかということが、大きな分れめになるだろう。彼ら32回生を一年担任したころは、「どうしてこの生徒たちはこんなに物足りないのだろう。類型的な発想ばかりだし、自分というものをもっていない。」と不満ばかりもっていた。私の願いがちっとも響いていかない。そのことへの焦りも積もっていた。それは、実は、私自身が子供たちの何ものをも見ていなかったということに他ならない。

学級通信は、教師の主張と伝達事項とだけでは成立しない。生徒の日々の姿を描いてこそ、初めて生きたものとなってくる。そしてその為には、教師の側がしっかり目を見開いておくことが必要なのである。クラスノート生徒版は生徒個々の内側で蠢(うごめ)いているものを伝えてくれた。クラスノート母親版は、生徒が一日の三分の二をすごしている家庭の様子を伝えてくれた。それらのものをすべてトータルしたものとして生徒を見つめない限り、私たちは、「生徒の姿が見えた」とは言い切れないであろう。

通信を発行し続けるということは、まさしく、そうした事実を私に思い知らせる作業であった。

生徒の内側にあるものを大切にしつつ、ともに生きることを決意してからは、夜遅くまでガリを切ることもほとんど苦痛ではなかった。

子供たちは限りなく心暖かい存在である。二年五組の生徒たちは、「担任への通知簿」に次のようにまで書いてくれた。

「私としては、ひーさん（私の綽名(あだな)である）が年とって校長せんせいになっても、ずっと88点のままでいてほしいデス。88点以下になることを心配しているのではなく、100点になってしまうことを恐れているのです。ひーさんには優等生より三枚目役の方があってると思います。」

「先生の場合は担任になってもらわないとよさがわからないのだと思います。……これからも学級通信だけは続けて下さい。」

「もし万一、私がお嫁さんに行くようなことがあったら、何はなくとも通信だけは持っていこうと考えています。」

私はこの三年間、子供たちのこうしたやさしさに支えられてきた。三年の間に、子供たち一人一人がどこまで自立した主体を形成したか、まだまだ不安は多いが、学級通信を発行し続けるという持続的な実践によって、彼らが変わってゆく場に、立ちあってゆくことが可能であったのだろうと考えている。

六、残された問題点

少なくとも二つの問題が残されている。一つは、クラスノート母親版のことである。十二月頃一人の母親がこんなことを記してくれた。

「月日のたつのは早いもの早我が子も二年生後一学期を過ぎれば三年と高校生活も半ばを過きました。

此の間毎日勉強にクラブ活動に二里半の道をかよって呉れて居ります親など子供の勉強の足しになったのは小学校一二年くらひ今頃はさかねじ何も言えないただがむしゃらに働いているものを出してやるのみそれも充分な事はしてやれないが出来る丈頑張ってやらねばならぬ

それももう二年生後一年早いものです本人は進学の夢を持って居りますが大分おくれて居る様ですが御熱心なる田中先生におすかりして居ればきっとすくわれると思って安心致して居りますどうぞよろしくお願ひ致します」（原文のまま）

この素朴な母親の願いは私には重いものであった。大抵の母親がかなりの達筆で見事な文章をつらねているなかで、このようにストレートに表現された親の思いに、返す言葉もなかったこともさることながら、この母親ノートは結局、何人かの教養ある母親たちのサロンと化していたのではなかったかという思いにとらわれざるをえなかったのである。前述のKの母親にも、この母親とは二年の時には関わりがなかったのだが、「私だったら、そんなのに、本音を書いたりしませんわ」と言われてしまった。親と教師が肉声で対峙する為には、なお緻密な実践が必要であろう。大事なことは母親ノートを回覧した位で、親と教師が、あるいは親と親とが「肉声」で語りあえるなどとは思いこまぬことであろう。あくまでも一つの補助手段なのだということを忘れぬことである。

もう一つの問題は、学級通信発行に、もう少し生徒自身が直接関わることができなかったかということである。生徒のイラストを写しとったり、原稿を書かせたりしたが、結局は自分たちが創っているという思いとはほど遠かったであろう。これについては、さまざまにすぐれた実践があろうから、これ以上の言及はさけるが、次回、学級通信を発行する段には一考を要することであろう。

ともかくも三年間、鉄筆でガリにむかってきた。やむをえぬ時はファックスを利用したが、極力ガリ版を使ってきた。ツブシの技術を学んだり、各種の鑢を買い揃えたりしてきたが、これらはいわば私の好みの問題である。結構凝り性なのかなと思ってみたりもする。

好みの問題といえば、毎号、必ず現代詩を一篇紹介してきたのも、私の好みである。自分が表現しきれぬ部分をそれらの詩に託そうとしたのかもしれない。引用された詩人たちははた迷惑な話であったろうが、毎号どんな詩が紹介されるか楽しみにしてくれた親子がいたのはありがたい話であった。

私の実践報告はここまでである。本当は、発行した通信をお見せすればそれで事足りるのであろう。そしてまた、そうしない限り、何も報告したことにはならぬであろうと思う。しかし、それも無理なことなので、こうした仮の報告となってしまったことをお許し願いたい。